

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32690

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13069

研究課題名（和文）在日朝鮮人文学と「本名を呼び名乗る」運動の関連性についての研究

研究課題名（英文）A Study on the Relevance between Zainichi Korean Literature and the Movement of calling 'Real Name'

研究代表者

康 潤伊（KANG, Yuni）

創価大学・公私立大学の部局等・助教

研究者番号：90822198

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：当初の仮説の通り、「本名」を名乗ることに関する抵抗や違和感は同時代的に多々みられた。具体的内容として注目に値するのは、当事者の運動推進者・参加者においてはすでに乗り越えられた壁として語られていることであり、一方で日本人教員側からは、なぜ「本名」を名乗ることが必要なのかに対する理解不足への反省もしばしば語られていたことである。抵抗や違和感は、後年の振り返りにおいては乗り越えられた壁として概括して語られていくことになるが、その背景には教員側における「反省から超克へ」という変遷があったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「コロナ禍」や研究代表者の業務における大きな変化などにより十分な研究成果が挙げられたとは言い難い本研究課題だが、概要でも述べたように後年の研究や運動の総括・振り返りにおいては超克された課題として後景化されて語られていた、同時代における運動への違和感や抵抗のパターンを整理したうえで、それを運動の推進者がどれほど把握していたかを明らかにした点が本研究の意義として挙げられる。

研究成果の概要（英文）：As originally hypothesized, there was a lot of reluctance and discomfort about using "Real name" in the same period. What is noteworthy as a specific content is that the campaign promoters and participants of the concerned parties are talking about the barriers that have already been overcome. On the other hands, reflection on the lack of understanding of whether it is necessary was often spoken by Japanese teachers who were also promoters. In retrospect in later years, resistance and discomfort were generally talked about as barriers that were overcome. In the background, it is thought that there was a transition from "reflection to overcoming" on the teacher's side.

研究分野：日本近代文学、在日朝鮮人文学

キーワード：社会運動 在日朝鮮人

## 1. 研究開始当初の背景

本研究では在日朝鮮人運動の一環である「本名を呼び名乗る」運動（以下「本名運動」）と在日朝鮮人文学を考察対象とした。「本名運動」とは、差別を避けるために通名の使用を強いられてきた在日朝鮮人が、民族名を取り戻すことで人間性の回復を試みた運動で、1970年代から1980年代にかけて、関西地域を中心に展開された。日本で通学する学生に本名を勧める指導などが、主に小中高校や夜間中学などで行われた。

「本名運動」は、創氏改名を強いられた歴史的背景を念頭に置いている。金一勉は「在日朝鮮人が、「日韓併合」以来、その奪われた主体性をとり戻すための一つの方法として、日本名（通名）ではなく、朝鮮名（本名）を名のるというのは本質的に正しい」が、「戦前・戦後を通じて日本社会にある朝鮮人に対するゆがんだ偏見」によって、容易ならざるものとされてきたのだと述べている（『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』三一書房、1978）。創氏改名によって奪われた民族的主体を本名によって取り戻さねばならないが、本名を名乗れない差別構造があるという二重の怒りがあったのだ。

「本名運動」は、民族名を名乗れば民族的主体が回復されるという熱い確信によって成り立っている。現在でも民族名は、民族的アイデンティティの根幹あるいは象徴として非常に重視されている。本名を名乗ることが「人間としての最初の関門」だと言われるほどだ（尹健次『「在日」の精神史3』岩波書店、2015）。したがって「本名運動」は、現在でも運動史の観点から肯定的に評価されることが多い。「本名運動」研究には、「本名運動」を推進した団体の資料から個人のアイデンティティ形成を論じた倉石一郎『差別と日常の経験社会学 解読する私の研究誌』（生活書院、2007）や、倉石と同じ立場の李洪章『在日朝鮮人という民族経験 個人に立脚した共同性の再考へ』（生活書院、2016）などがある。これらの知見を活かしつつ、本研究では運動の場における軋轢や葛藤により注目した。なぜなら、実際には「本名」を名乗らされることに対する異議申し立てがあったからだ。例えば扇田文雄「本名を名のることの意味」『季刊三千里』12号、1977年）は、「めいわくするのはもうたくさんだ」という「在日朝鮮人のいつわらざる声」が確かにあったとしているからだ。

在日朝鮮人文学においても、名乗ることの葛藤は多く表現されてきた。古くは立原正秋（1926-1980）、新しくは鷺沢萌（1968-2004）などである。両者は日本名を用いているが、在日朝鮮人の名前やアイデンティティをめぐる葛藤を積極的に作品に描いている。特に鷺沢萌は、民族名・日本名・民族名と、名前を幾度も変えた女性を描いている（鷺沢萌『ビューティフル・ネーム』新潮社、2004）。鷺沢萌『ビューティフル・ネーム』は、名乗りを何らかの主体の回復や獲得ととらえてはならず、本名をアイデンティティの象徴ととらえる見方を相対化している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「本名運動」における葛藤の言説を整理することで、運動を取り巻く言説空間を総合的に復元すること、名前を主題とした在日朝鮮人文学を分析することで、運動のイデオロギーをどのように相対化し批評しているのかを明らかにすることとした。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は以下の三つで設定された。

- ・「本名運動」活動の記録資料や同時代言説の調査・収集
- ・収集した資料の分析
  - 一つ目の調査を進める過程で集めた資料から、葛藤や軋轢、衝突などの言説を整理し、実態を明らかにする。これまでポジティブな側面のみが強調されてきた「本名運動」のネガの部分を中心に、運動の総合的評価を目指す。
- ・上記の二つの研究成果をふまえたうえで鷺沢萌や深沢夏衣作品を分析
  - 名前を扱った在日朝鮮人文学を、二つ目までの研究で明らかにした総合的評価をふまえたうえで分析する。前掲の鷺沢萌『ビューティフル・ネーム』や、通名と本名のはざまに葛藤する主人公を描いた深沢夏衣『夜の子供』（講談社、1992）などを主な対象とする。両者は「本名運動」への関心が高く、半強制的に本名を名乗らせることもあった運動側に対する批判意識を感じられる。両者の作品と言論活動を追うことで、団体側の活動記録からは直接的には浮かびあがってこない、潜在的な問題系への批評性を見出すことができると考える。これによって、「本名運動」の言説空間をより広くとらえなおすことを目指す。

## 4. 研究成果

本研究課題は、「コロナ禍」や研究代表者の環境変化などにより十分な研究成果が挙げられたとは言いがたかったが、主な成果は以下の三つに集約される。

一つ目に、朴慶植文庫における調査を通して、1970年代末から1980年代にかけて、南北政

府への指示を母体とする各種団体においても「本名」の問題が積極的に取り上げられていたことがわかった。「本名運動」は教育現場が主ではあったが、より広く「本名を名乗ること」への関心としてとらえてみると、裾野が非常に広い思想的潮流であったことがわかった。1980年代といえば「帰化」や日本人との結婚が非常に増えた時でもあったため、日本への同化（それは国家と強いつながりを持つ団体にとっては支持母体を失うことであり死活問題である）を危惧した団体によるキャンペーンのアイコンとして「本名」が掲げられた可能性がある。

二つ目に、運動への違和感や抵抗はやはり多く見られた。その中でも特筆すべきなのは、当事者による文章における違和感や抵抗感は、乗り越えられた壁として語られていることであった。つまり同時代からすでに後年形成される超克の論法が見られたのである。一方、夜間中学教員による報告などでは、例えば「日本人が通名を強制したのにまた日本人の都合で本名を名乗らせようとするのか」などといった当事者からの痛烈な批判があがっていた。また、日本人教員による、なぜ「本名」を名乗ることが必要なのかに対する理解不足への反省も見られた。教員側による抵抗や違和感は、後年の振り返りにおいては乗り越えられた壁として概括して語られていくことになるが、その背景には教員側における「反省から超克へ」という変遷があったと考えられる。

三つ目に「本名」を名乗っている当事者・日本人教員側に共通して見られたのは、「本名」を名乗ることが「個としてよりよく生きること」と密接に関連づけられていたことである。これは定住志向が一般化しているという点で、指紋押捺拒否運動など以降に展開される権利運動との連続性を持つものである。「本名」を名乗ることは時に「生死に関わりかねないこと」とまで注意されながらもそれでもなお「本名」が要請されるのは、「個や日常をよく生きるため」であるという論理が多々みられた。こうした美しくも抽象的な理念は、啓蒙され教育される側との乖離を生んだと現時点では考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 康潤伊
2. 発表標題 届かない 声 を届けるために 鷺沢萌 『ビューティフル・ネーム』を中心に
3. 学会等名 日本近代文学会東海支部
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------